

地域医療を担うドクター vol.11

特定医療法人 祐愛会グループ 織田病院



祐愛会 織田病院 と 理事長 織田 正道 先生

祐愛会織田病院は佐賀県鹿島市にある。同市は城下町として県南部地域の中心として栄えてきた人口 3.3 万人の町である。東部は有明海に面し、南西部は多良岳山系に囲まれた自然環境に恵まれた所であり、JR長崎本線特急で博多駅から1時間の距離に位置する。市内に公的病院がなく、病床数(一般) 111 床と小規模ながら、「民間といえども個人のものではなく社会の公器である」との考えで、急性期医療を中心に専門的医療も担えるように努めている。現在、病院から半径 10km 圏内に住む鹿島市やその周辺地域住民約 6 万人の二次医療機関としての役割も担っている。診療科目は、内科、外科、消化器内科、循環器科、脳神経外科、形成外科、耳鼻咽喉科、皮膚科、放射線科、麻酔科、リハビリテーション科を標榜しており、常勤医師 25 名、非常勤医師 12 名、看護部 115 名を配置している。

また、平成 16 年(2004 年)には開放型病院、平成 18 年(2006 年)には DPC (diagnosis procedure combination:診断群分類別包括評価) 対象病院となっている。

今回、特定医療法人祐愛会 理事長 織田正道先生に、同グループの変遷と地域医療への取り組みについて意見を伺った。

入院と同時に退院支援の実施 リエゾンナースの役割

「当院では、患者さんの入院と同時に退院に向けての支援を開始します。」と語る織田理事長。

その言葉に一瞬耳を疑った。なぜ入院と同時に退院させることを考えなければならないのか。

「医療制度改革の流れで在院日数の短縮化が進んでいます。そうすると私たちは地域の医療機関との前方連携だけではなく、退院する患者さんの受け入れ先である後方連携が重要となります。従来のような漫然とした連携ではなく、疾病や医療必要度に見合う医療機関を選択し、迅速且つ密接な連携を取り、後方医療機関の病床確保や、安心して自宅に帰ることができるように、退院支援を行う必要が出てきます。このような連携作業は医師の指示が出てからでは遅く、入院早期より対応していかなくてはなりません。」

「そこで全入院患者さんを対象とし、外来から入院時、入院中、退院後に至るまで継続的で且つ一貫した対応可能な組織作りを目指しました。」

「当院では、こういった問題を解決するために“リエゾンナース”を配置することにした。ここで言う“リエゾンナース”とは、看護領域で使われる“リエゾン精神看護専門看護師”のことではなく、病院と地域をシームレスに繋ぎ、退院支援・調整を図る看護師のことを呼んでいます。入院患者さんが安心して自宅に退院していただくには、医療側の視点で退院後の生活を考えることが非常に大切になります。リエゾンナースは患者さんが入院すると同時に、主治医・リハビリスタッフ・MSW・ケアマネジャーの中心になって退院支援のスクリーニングを開始します。そして、退院後の生活における問題点を明らかにするために定期的なカンファレンスを行い、その解決策を考えます。ご高齢の患者さんが増えてきている今、こうした“リエゾンナース”の役割は不可欠だと考えています。」

プライマリケアから急性期医療まで

織田病院の歴史は、優に 100 年を超えるという。「鹿島織田家は、織田信長の実弟である茶人の織田有楽斎の三男である織田俊長を祖として私で 14 代目になります。」

「明治 43 年(1910 年)に私の曾祖父と祖父がこの地に病院を移し診療を開始しました。昭和 62 年(1987 年)、私は病院を継承し、公的病院に成り代わる急性期病院を目指しました。」

「同年 7 月には、プライマリケアから専門的な医療までを提供できるように新病院の竣工に着手し、救急病院の指定も受けました。その後、地域の需要に応えるため健診部門を充実すると共に、患者さんの早期在宅復帰を目指してリハビリテーション科も開設しました。」

「平成 9 年(1997 年)より、インフォームド・コンセントのツールとしてクリニカルパスを導入し、医療の標準化とサービスの向上に努めました。翌年の平成 10 年(1998 年) 佐賀県初の病院機能評価認定(一般病院 A)も受審し認定を受けました。この認定は、病院スタッフにとって大きな励みになると同時に、自信を高めることに繋がったと思います。」

現在、織田病院の平均在院日数は 12 日を割り、ここ 3 年間の平均病床稼働率は 90%を割ることは無かったという。また、平成 22 年(2010 年) 日本経済新聞の病院機能評価ランキングにおいて全国の著名な病院を抑えて第 1 位に選ばれている。これは、病院の診療実績が客観的にも高く評価された結果だといえる。

WIN WIN の関係 「連携センター」の開設 電子カルテをクラウド化

織田病院を見学して一番驚いたことは“連携センター”の存在である。そこでは、ヘッドホンマイクを装着した女性スタッフが掛かってくる電話に手際よく対応している。そこだけ見ると“院

内”とは到底思えない光景である。

「私どもの病院は佐賀県南部医療圏の救急を担っています。基本的に、救急患者の受け入れなど地域の先生からの紹介はすべて受け入れていますし、さらに当院で対応できない高度医療が必要な患者さんは大学病院との連携も図っています。こうした病診連携を効率的に行なうために“連携センター”を設置しました。そこでは、専門外来や検査(CT・MRI・内視鏡など)の予約も行なっています。その結果、救急車の受け入れなど地域の先生からの紹介は月間 270~280 件に上りますし CT・MRI などの共同利用は年間約 1000 件を数えます。」

「私は、病診連携をスムーズに行うには“患者さん情報の一元化・共有化を図る”ことが大切だと考えます。そのため“佐賀県診療録連携システム(通称ピカピカリンク)”に加入して大学病院や公的病院との診療情報の共有化を図っていますし地域の先生が患者さん情報(画像・検査結果・処方履歴など)をいつでも閲覧できるように ICT を活用した情報ネットワークの構築にも努めてきました。そして平成 24 年(2012 年)には、電子カルテそのもののクラウド化を図りました。従来の電子カルテは院内のネットワークに限られたものでしたが、クラウド化により院外でも電子カルテの使用が可能になりました。当グループでは訪問診療や訪問看護の現場からも iPad を利用し直接電子カルテを閲覧・入力することで情報を共有しています。」

長寿社会の環境モデル ゆうあいビレッジの開設

「現在、独居世帯や高齢者世帯が増加し、認知症の患者さんも急増しています。こういった時代に早期退院を促すには、安心して暮らせる“退院の受け皿”が必要であると考えました。それを実現するために、当グループでは平成 9 年(1997 年) 介護老人保健施設などの施設系サービス、グループホームなどの居住系サービス、通所系サービス、訪問系サービス機能を集結した“ゆうあいビレッジ”を開設しました。

“ゆうあいビレッジ”では、医療・保健・福祉分野を包括的に提供することを目指しています。そこでは、それぞれの分野のスタッフがお互いの役割を理解し尊重し、職種を超えたチームアプローチを行なっています。また、環境的には北欧風のデザインを基調として公園の中に施設や住宅群を配置しています。これは四季を感じさせる生活環境が、高齢者に安らぎを与えると考えたからです。」



クラウド化された電子カルテ



ゆうあいビレッジ

ボーダレスな視点 超高齢社会における地域医療のあり方

「わが国は高齢化と共に認知症の利用者も増えてきました。私たちは精神科の先生達とも連携し、地域で見守る体制の構築を急いでいます。そこで当グループでは、認知症ケアの向上を目指して平成 17 年(2005 年) 認知症ケアで定評のある豪州のハモンドケアグループと提携しました。これにより、お互いのスタッフが定期的な海外研修を通じてアセスメントツールを作成するなど、実践レベルの共同研究を行なっています。また平成 22 年(2010 年) 国際姉妹病院として米国ハワイ州のカピオラニ・メディカルセンター・パリモとも提携しました。その理由は、同センターが当院と同じように 100 年の歴史があり、同規模の病床を持つ救急医療における基幹病院だからです。グローバル化する時代において、こうした海外施設との提携は人材教育など学ぶ点が多くあると思います。」

「これから、わが国はますます少子化の影響を受け、看護師不足が深刻化すると思います。それを解決するために、医療や介護分野においても外国人の受け入れを進めて行かなくてはなりません。それには賛否両論がありますし、超えなくてはならない問題もあります。しかし、私は将来を見据えるはこの解決には外国人の活用をポジティブに考えるべきだと思います。そうした考えに基づき、当院では平成 20 年(2008 年) よりインドネシア人看護師を積極的に受け入れてきました。」

最後に祐愛会グループの今後の展開について尋ねた。「私どものグループがここまで発展できたのは、医師・看護師・スタッフなど“優秀な人材に恵まれた”からだと思います。地方にあるこの規模の病院で、優秀な人材を確保することはかなり難しいことです。それだけに、ここで働いているスタッフにはとても感謝しています。私は、祐愛会で働くスタッフが今後も夢をてるようなグループにしていきたいと思います。」

「私たちが暮らすこの地域は、間違いなくわが国の 10 年先の姿だと思いますし、今後地域のニーズは更に大きく変化してくると思います。だからこそ、私たちが行なっている日々の活動を“超高齢社会の新たな地域医療モデル”として全国に情報発信していきたいと思います。」

施設名:特定医療法人 祐愛会グループ

場所:佐賀県鹿島市大字高津原 4306(織田病院)

URL:http://www.yuai-hc.jp/

取材・編集担当

アイティーアイ株式会社 営業本部 満尾・小川
福岡市博多区博多駅南 3-7-37
Tel:092-472-1881

支社

福岡

支店

北九州・久留米・長崎・佐世保・大村・大分・熊本・八代・鹿児島・宮崎・沖縄

営業所

山口・筑豊・佐賀・五島・天草・川内・延岡・都城・鹿屋

連絡事務所

東京・東関東・千葉・東京西・神奈川・つくば

※弊社では、各種医療機器・設備機器・管理システムを取扱っております。お気軽にお問合せ下さい。